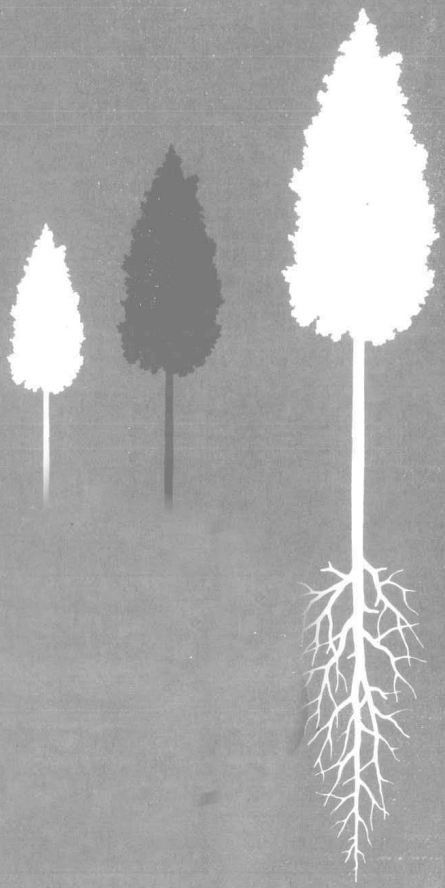
堺屋太一
世紀末の風景

紀末の風景

堺屋太一



文藝春秋

世紀末の風景

昭和六十年四月十日　第一刷

定価九八〇円

著者　堺屋太一

発行者　西永達夫

発行所　株式会社　文藝春秋

〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三―二三

印刷　精興社

製本　加藤製本

一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

© Taichi Sakaiya 1985　Printed in Japan

目次

下り坂の芝生……5
陽だまりの雑木林……93
蔦の窓から見た荒野……181
あとがき……266

装幀　伊藤憲治

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

世紀末の風景

下り坂の芝生

一九九三年・冬

1

「本日付けで当大興開発企画に出向して参りました望月明夫です。余暇事業部ソフト部付総務を勤めさせて頂きますので、よろしくお願いいたします」

「ソフト部長の黒木哲治です。こちらこそよろしく……」

二人の中年男は、固い表情で名乗り合ったあとで、手を握り合って声高に爆笑した。他人行儀な自己紹介の交換は、親しい旧友同士のおふざけだったのだ。

「待っとったぞ、君の来るのを。チームを組むのは何年振りかねえ、朝日カ丘高校のラグビー部以来だからなあ……」

まず、そういい出したのは、部長と自己紹介した小肥りの男、黒木哲治の方だった。

「そうねえ……二十七年になりますかねえ。一緒に大興商事に入ってから二十二年だから……」

望月明夫は、日焼けした頬を崩して答えた。二人は、一九四七年生れの同級生、それも同じ朝

日カ丘高校ラグビー部でスクラムを組んだ仲だ。
「そうか……もう二十七年か。今は一九九三年一月だもんなあ……」
黒木は、望月の言葉の後半を無視して呟いた。高校同級の同年入社とはいえ、東大卒の黒木にとっては、二流の私大出の望月が「一緒に入社した」というのは不愉快だった。
現に、今日からのポストは同じ部の部長と部付総務、決定的な違いがある。
黒木哲治の地位は、同年入社の者の中では最高位に属する。この会社——大興開発企画——は、資本金三十億円の子会社とはいえ、大興商事グループの中では数少ない成長会社だし、その中でも余暇事業部は有望視されている。ソフト部はそこの二番手、隣りの施設部に次ぐ格付けだから、この部長職は大興商事本社の中堅課長格と見なされている。膨大な数の中高年層を抱える総合商社においては、入社二十二年の四十五歳でこの地位にあるのは将来有望なエリートといえる。
それに比べて、望月のポストは閑職中の閑職。部付総務などといえばちょっと聞えはよいが、その実態は雑務担当の平。オフィスオートメーションの進んだ今では会議の椅子を並べるぐらいしか仕事がない。部下は脇にいる女の子一人、勿論管理職手当もない労働組合員だ。つまり、年功を積んだ不出来な社員に与える虚名、いわゆる「お慰めポスト」なのだ。そのことを考えれば、黒木としてはせめて「同じ年に入社して」というぐらいの節度は持って欲しい気がするのである。
このことが、黒木哲治に意地悪い言葉を思いつかせた。
「早速だがねえ、望月君。ひょっとすると、しばらく沖縄へ行ってもらわにゃならんかも知れんよ。何といっても、今、当事業部の最大のプロジェクトは、『沖縄夏秋ネオポリス』だからね」
「へえ……沖縄ですか……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

望月は驚きの表情を作りながらも、まんざらでもなさそうな声を出した。
「そら、どのくらいの期間ですか」
「さあねえ……」
黒木は、相手の意外な反応に戸惑い、あてのない答えを考え出す時間を稼ごうとしてしゃべった。
「とに角、大変なんだよ、あれは。広さ三一七万ヘクタールの土地に二万人を収容する施設を造るんだからねえ。しかも入るのは夏秋期の人々、つまりリタイアした高齢者だ。仕事のできる条件を作れだの生き甲斐を与えよだの難しい問題があってね、健康管理や医療関係だけでもやり切れんのにだよ。わがソフト部としては特色ある魅力的な企画作りに七転八倒の有様なんだからねえ……」
「そらまたどえらい老人ホームですね。四、五年は覚悟というわけですか」
望月は大真面目にそんなことをいったあとで、楽し気に「ウヘヘ」と笑った。その声がまた、黒木を苛立たせた。今日から自分が所属する職場の重要なプロジェクトに全く無知らしいのも不快だったし、仕事の話をちゃかすような笑い方も気に入らなかった。そのせいで、黒木はさらに厭味な嘘を続ける気になった。
「ま、そんなことのないように努力はするがね。君だって、今さら沖縄くんだりに単身赴任はつらいだろうからなあ……」
「いやいや、社命とあればどこへでも。家族共々に参りますよ。家なんか貸せばいいですから……」
望月はそういうとまた、ヒクヒクとのど仏を動かした。この男は、今から十数年前、三十歳前

後で早々と浦安のあたりで土地付一戸建てを買っている。あの「石油ショック」の二、三年後、一時的に土地の値が下った時期だ。
「ふーん、家を貸して家族連れて行くか……」
黒木は思わず眉間に縦皺を刻んだ。いまだに公団住いの黒木には、家の話を持ち出されたのが腹立たしい。
「しかし……君んところの長男は近々高校入学じゃないのかね……」
そういった黒木は、相手の論理を突き崩したい検察官的心境になっていた。
「いかにも。上の坊主は来年高校、下の娘は中学進学ですよ」
望月は、黒木の指摘をおまけ付きで認めたが、すぐに続けて、
「けど、沖縄にも学校はあるでしょうよ」
といってのけた。明るい、それだけに無責任な響きのあるいい方だ。
黒木は苛立ちに耐えかねて視線をそらした。だが、耳にはダメを押すような望月の言葉が流れ込んできた。
「近頃ね、うちの坊主も親に似てタコ上げにこっとりましてな。沖縄あたりでのんびりやらしたら喜ぶと思いますよ、きっと……」
〈何がタコ上げだ、いい歳をして……〉
黒木は、心の中で毒づきながらも、何とか笑顔を作り、
「そら結構だ。ま、頑張ってくれたまえ」
といって話を打ち切った。話せば話すほど不快感がつのるのが分ったからだ。

〈相変らず阿呆な奴だ……〉

黒木哲治は、望月の長身が遠ざかるのを待って、机上の書類に視線を戻しながら、そんなことを考えていた。

〈阿呆な上にやる気と真面目さが足りん〉

と。それは、黒木が二十七年間持ち続けて来た望月明夫に対する評価だ。

黒木と望月は、子供の頃は親友だった。私立朝日カ丘中学から同高校へと、六年間も同級であり、高校時代には共にラグビー部に入り、二年生の後半と三年生のはじめには一応正選手にもなった。二人共、そう熱心に練習したわけでも体力才能に恵まれていた方でもなかったが、受験校として知られていた朝日カ丘では誰でもそれくらいにはなれたのだ。その代り、対外試合は少なく勝った記憶など全然ない。何しろ一時間もグラウンドでぶらぶらすると、部員の大半が進学塾に走り出すような状態だったのである。膨れ上った「戦後っ子」世代の入口に当る彼らは、幼い頃から激しい競争を余儀なくされていたのだ。

実際、黒木と望月が本当に親しくなれたのは、朝日カ丘の教室やグラウンドにおいてではなく、五年間も通い続けた進学塾・育俊ゼミナールのお陰かも知れない。ここでの成績が共に「上の下」ぐらいだった二人は、敢てライバル意識を持つこともなく、東大法学部を目指す戦友として付き合えた。東京都内でも難しい進学塾といわれた育俊ゼミでこの程度なら、十分合格可能な範囲だったのだ。

しかし、一九六五年三月の現役受験では二人とも失敗した。そして、それと同時に二人の友情も消え失せた。

黒木哲治は、二十七年たった今も、その日のことをよく憶えている。

「残念ながら、お互いだめだったなあ……」
合格者氏名の並ぶ掲示板の前で、望月は早々とそういった。
「ふーん……そうらしいなあ、今年は……」
諦め切れぬ気持ちの黒木は、最後の単語に力を籠めた。既に「来年こそは」の闘志を燃やしていたのだ。だが、望月は、
「そうか……、君はまたやるつもりか……」
と、囁きかけて来た。
「俺なあ、実は京北大の商経学部にうかったんでな、そっちへ行こうかと思ってるんだ。もう父親が入学金も払い込んでしもたし……」
「君、京北なんかに行くのか……」
驚いて問い返した黒木に対して、望月は、
「うん、もう受験勉強なんかしんどいからな」
と呟いてニヤリとした。
「何だい、たった一回落ちただけでもうギブアップするなんて、男らしくないぞ」
そう叫んだ時、黒木の声は早くも怒気を含んでいた。
「ギブアップやなんて……。まあ、そう考えなくともいいんじゃないの。所詮、どこの大学へ行っても大差ないのと違うかなあ……」
長身の望月は、ニヤついた顔をすり寄せてそういった。はじめて見るような厭な笑い、そして吹きかかる息の生臭さが、黒木には堪らなかった。
「そうか、それならもう帰れよ。俺は合格した奴らの顔をもうちょっと見て回るから」

黒木は早口にそういうと、我が影を振り切るように人垣を押し分けて歩き出した。これ見よがしに胴上げする連中の姿も、悲し気に掲示板を見上げている母子連れも、その時の黒木の目には入らなかった。

彼が五感を取り戻したのは、人影もまばらな生垣の側で沈丁花の香を嗅いだ時だ。それは、望月明夫の生臭い息とは正反対に、憤怒と落胆の渦巻く胸に心地よい清らかな緊張感を与えてくれた。

「これが俺の生きる世界だ……」

黒木は何となくそう思った。

その日以来、黒木哲治にとって、望月明夫は軽蔑の対象以外の何物でもなくなった。京北大に進んだ望月からは、何度か誘いの電話があったが、黒木は一度も応じなかった。息子の心理を解しない母親が、かつての親友の噂などをするのさえ腹立たしく、他のことにかこつけて怒りを爆発させることもあった。そしてそれが、この男の勉強の励みにもなった。

幸い、黒木哲治は翌年の受験で東大文科一類に合格できた。希望の法学部に進むコースである。だが、彼はそれをかつての親友に知らせようともしなかった。新聞か何かでそれを知った望月が、祝いの電話をかけて来た時も、至極無愛想な応答をしただけだった。

「俺とあいつは住む世界が違うのだ」という気持ちが抜けなかったのだ。あるいは、勝ち誇る気分が、そんな感情を深めていたのかも知れない。

ところが、それから四年後、黒木哲治はこの「住む世界の違う」軽蔑の対象と同じ場所に生きることとなった。

四年間の学生生活を、女学生との交遊とも学園紛争とも無縁に過した黒木哲治は、一九七〇年

四月、その頃最も人気のあった就職先の一つ、大手商社の大興商事に入社した。そしてそこに、望月明夫の姿を見出した。それも、同年入社の同僚としてである。

望月明夫の方も学生運動には関わらなかったが、長い休講の間にビートルズの音楽とタコ上げに熱中した結果、一年留年した挙句、同じこの年に大興商事に入社したのだ。

「よお、黒木。また一緒になったなあ……」

入社式の直後に、望月明夫から屈託のない声を掛けられた時、黒木は、沈丁花の香の中に生臭い汚臭が吹き込んで来たような不快さを感じた。

「どういう間違いであんな奴がこの会社に入れたのだろう……」

最初、黒木は相手の好運を呪いたい気持ちになった。だが、すぐそれは、

「大興商事ともあろうものが、なんであんな阿呆を入れたんだ」

と、自分の選んだ職場に対する怨みに変った。

しかし、望月明夫の入社は異例の好運でも会社の人事担当者の不明のせいでもなかった。高度経済成長の末期、誰もが目もくらむような未来の予測に酔い痴れていたその頃は、どこの会社でもやたらと大勢の大学卒業者を採用していたのだ。大興商事とて例外ではない。いやむしろ、その典型でさえあった。非財閥系ながらも日本有数の巨大総合商社に成長したこの会社は、「人材さえ抱えれば必ずそれに応じた仕事量が出て来る」という「成長痴呆症的発想」に陥っていたのである。

それは数字の上でもはっきりと現われている。一九六〇年代の中頃まで、この会社は毎年百人前後の大学卒とそれを少々上回る程度の高校卒しか採用していなかった。ところが、その後はどんどん増え一九七〇年前後の数年間は、大学卒の男子だけで三百人以上も採用した。黒木や望月

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com